

富永神社祭礼奉納

とき 平成十八年十月六日(金)  
午後五時始  
ところ 富永神社 能楽殿

能組

仕舞

鞍馬天狗  
嵐馬天山  
鞍馬天狗

加藤晃  
今泉尚美  
村田昂平

狂言

口真似

太郎冠者 田中つぐみ

主人 竹内晴美  
客 黒田真里絵  
後見 大原正巳

仕舞

経雲林  
錦玉院政  
木葛院政

島野尚大郎  
平野阿裕美  
平野瑞季  
島考三郎

狂言

文荷

太郎冠者 小澤貞博  
次郎冠者 山本勝

主人 権田重紘  
後見 大原正巳

5:45分頃

仕舞

狸高玉  
砂々葛

伊藤杉人  
長藤杉人  
田共永  
竹下直秀

(休憩 三十分)

狂言

骨皮

新発意 住持 天野雅夫  
酒井宏

傘借 清川松佐  
馬借 酒井淑規  
施主 加藤賢一  
後見 小林常男

7:00分頃

7:25分頃

能

経

シテ

杉

政

浦史佳

佳

ワキ

竹

内

省

吾

大鼓

清

水

利

高

笛

太

田

研

司

8:10分頃

狂

言

貫

智

智

佐

野

泰

三

男

水

谷

至

男

一

男

後見

小

林

常

男

8:40分頃

半能

葛

シテ

今

泉

英

三

神樂

ワキ

竹

内

三

郎

大鼓

河

村

総

一郎

收

大鼓

中

嶋

康

夫

後見

太

田

康

弘

地謡

伊

藤

杉

人

鈴

木

崇

史

地謡

牧

野

省

吾

高

林

白

牛

(終了予定九時十分頃)

主催本町区

あらすじ

狂言

口真似くちまね

主人が一緒に楽しく、酒を飲む相手を見つけて来いと太郎冠者に言いつけますが、連れて来た男は、酒癖が悪いので冠者を叱ります。追い返そうとする冠者を、主人はとどめます。さて、なんとして男を追い返すか……………。

狂言

文荷ふみにない

主人からことづかった、恋文を太郎冠者と次郎冠者で届けに出かけますが、二人で担ってもなぜか文が重い。ついに二人は、文に何が書いてあるか気になって、見てしまいます。そこへ主人が心配になって、やってきますが……………。

狂言

骨皮ほねかわ

寺を譲られることとなった新発意は、住持に檀那衆が大切と教えられます。傘を借りにきた男に、新品の傘を貸してしまふ。住持に報告すると「骨と皮になつてゐる傘は使えない」といつて断われといひます。次の男は、馬を借りに来ます。その次は法事を依頼に来ますが、さてどんな断り方をするのか……………。

能

経政つねまさ

京都の仁和寺、御室御所（おむろごしよ）の守覚（しゅがく）法親王は、琵琶の名手である平経政を、少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一の谷での源平の合戦で、経政が討たれたので、生前、経政にお預けになったことのある『青山（せいざん）』という銘のある琵琶の名器を佛前に供え、管絃講（かげんこう）を催して回向（えこう）するように、行慶僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人びとを集めて法事を行ないます。するとその夜更け、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いの有難さにここまで参ったのであると、僧都に声をかけます。そして手向けられた琵琶をなつかしく弾き、夜遊の舞をまつて興じます。しかしそれもつかの間、やがて修羅道での苦しみにおそわれ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

狂言

賞聾もうらいむじ

酒を飲んで帰宅した男が、酔った勢いで妻を家から追い出してしまふ。妻は、度重なる夫の酒乱に我慢できず、子供を置いて実家に帰ります。翌朝、酔いがさめて妻を、実家に迎えに行きますが、舅は、娘はここにはいないと言ひます。そして……………。

半能  
葛城かつら

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折りしも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、庵に案内し焚火をたいてもてなします。そして雪の中で集めて束にした木々の細枝を標（しもと）と呼ぶのだといい「標結ふ葛城山に降る雪の、間なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて夜の勤行を始めようとすると、女はお勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思っ、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔役の行者に命ぜられた岩橋を架けなかったため、不動明王の索に縛られ苦しんでいると、消え失せます。（中入）

そこへ麓の男が上って来たので、葛城山の岩橋の事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇特なことと思ひ、夜もすがら女神のために祈祷します。するとその修法にひかれて葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ、大和舞をまい、暁近くなると、岩戸の内へ姿をかくします。

半能

一番の能の前半をほとんど省略し、後半のみを演ずる演能方法である。